

---

# 紅夜に咲いた華

日向夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅夜に咲いた華

### 【Zコード】

N7908M

### 【作者名】

日向夏

### 【あらすじ】

時は江戸時代末期、ペリーの来航の衝撃冷めらぬ江戸の街。風の強く吹く冬の夜に、あちこちから火の手が上がる。  
家族を殺され、攘夷の只中を駆け抜ける青年の、始まりの話。

(前書き)

作者初めての歴史モノです。

もー、なんつーか、おかしなところがあつても田を隠してやつてくれ  
ださい。

頼むから、『こんな刀なんかねーよ』とか『アクションに無茶があ  
りすぎる』とか言わないで下さい。頼むから。  
作者凹みますから。ベツコベコ。

はつ、はつ、はつ・・・・・。

不気味な紅色に染まる背景に縁取られた江戸城に向けて、一人の少年がひた走りに走っていた。背中に竹刀を入れた袋、頭に巻いたままにしてある手ぬぐい、紺色の使い古した袴。彼の名は市富駿一郎。江戸では神童と呼ばれるほどの剣の使い手だ。火事の只中にある我が家に向けて、江戸城の内堀が見えた所で駿一郎はさらにスピードを上げた。

ようやく走りこんだ我が家は、火事だと言つのに不気味に静まり返つていた。

「……父上？ 母上？」

雨戸をぴちりと閉めたそこは、誰かが入り込むのを拒絶しているようだ。何故だか家に入るのが躊躇われた。何か、気配がするのだ。父とも母とも、弟とも違う禍々しい気配。

『たかが我が家に入るのにも臆するのか？ しつかりしろよ！』  
氣後れする自分を叱咤し、音を立てぬよう引き戸を開け、しんと冷え切った廊下をひたひたと裸足で歩く。普段父と母が使っている寝屋から、人の話し声がする。スッと襖を開けかけて 背筋が凍りついた。

部屋の中は血の海だつた。今も尚広がり続けるどす黒い染みの中央に、両親と弟が折り重なるように倒れている。3人ともうつ伏せにだつたが、人の形を留めているのが不思議なほど、刀傷が無数に走つていた。

その周りでは10人程の男たちが血まみれの刀を手に屯していた。

「……おい、餓鬼はこいつだけか？ 僕の聞いた話じゃあ、あと一

人居るはずだが

「ああ、そうだ。しかし、そろそろ時間切れだ。火が回つて来る」

「しょうがねえ。」ここんところは引き上げるぞ

いきなり襖が開き、会話をしていた男たちがぞろぞろと出てきた。

「！！！」

突然のことでの身を引く暇もなかつた。あつといつ間に着物の襟首を掴まれて部屋の中に放られた。

「ぐつ！！」

したたかに床の間の柱に打ち付けられて息が止まつた。

「丁度良かつたなあ……、道場まで乗り込んで探す手間が省けてよお

…」

父と母、そして弟の死体越しに見るそいつらの顔はまさに鬼だつた。恐怖と必死に戦いながら、何か声を出さねばと口を開く。

「何だよ、貴様ら……。僕の家族に何故……？」

「答える必要はない……、まあどのみちてめえも殺すがな」

先頭の男が血に濡れた刀を上げると、他の男たちもそれに倣つて抜刀する。激突の衝撃でまだクラクラしたままの頭でも、相當に不味い状況だと言うことが分かる。相手は真剣だが、自分の武器らしい武器と言えば背中の竹刀だけだ。

「くくつ、江戸で神童と呼ばれたてめえも大人には敵わぬいか？ん？」

氣味の悪い笑い方をしながら男が迫つてくる。じりじりと後ろに下がりながら覚悟を決め、右手が竹刀を握る。その時、床についていた左手が何か棒の様な物を掴んだ。

それが何かを確認する間もなく、先頭の男が斬りかかつて来た。が、大きく振り上げた刀は、床の間の天井に刃先がめり込んで動きが止まる。

「ちつ！！」

両手を挙げた無様な格好の敵の鳩尾に竹刀を突き出す。

「なめるなア！！！」

刀から手を離し、掴みかかってきた男に姿勢を低くしてぶつかる。意外に柔らかかつた腹に竹刀が当たり、湿った肉の音と共に男が吹っ飛んだ。と同時に不吉な音を立てて竹刀が折れ、破片がそこらじゅうに飛び散る。それを好機と見たのか、先程の男よりはやや細い狐の様な目をした男が横合いから斬り付けてきた。

「くつ！」

咄嗟に折れて使い物にならなくなつた竹刀の鍔を投げ、飛び退る。そして右手に握った得物を見る。

それは黒光りする鞘に収められた日本刀だった。銘の部分は暗くてよく見えない。

「何を見ているつー！」

狐顔の男が再び斬りかかってきた時、鞘を払つて迎え撃つ。

キイイイイイイー！――！

金属と金属がぶつかり合う高い音が部屋中に響いた。

「何故…テメエが刀を持っていやがる…！」

「知・・・るかつー！」

一方は賊の白銀の刀、もう一方は駿一郎の闇の中で鈍く光る黒い刀だ。しかしこれまだ12歳の少年に大人に対抗できる力はなかつた。だんだん力負けし、畳に片膝をつく。

「もらつたアー！」

目を爛々と輝かせ、相手の男が駿一郎の刀を横に払う。胸を横薙ぎに斬りつけられる刹那、一瞬の判断で障子の方へ飛ぶ。障子が派手な音を立てて壊れ、駿一郎は庭に転がり出た。

「痛つ…」

さつき受けた斬撃で頬に浅い傷が出来ていた。その血が顎に伝い、刀に滴り落ちた。

ふいに、駿一郎の血が落ちた所から漆黒の気が立ち上つた。微かに

振動のよつな音も聞こえてくる。

「！？ 何だその刀は！」

月明かりを受けて闇色に煌くその刀は、少年の腕にしつくりと馴染み、しかも在るべき筈の重さが感じられなかつた。

「父上を…母上を…弟を…。俺の家族を殺した貴様らに、答える必要などない」

その声は、まだ幼さを残した少年のものではなかつた。聞く者が恐怖を憶えるような、低く冷たい声。襲撃者達は背筋に冷や汗が伝うのを感じた。

駿一郎は、そんな自分でないよつな声を遠くで聞きながら、沸々と身体の中で滾つていく何かを感じていた。

「「ふ、ふざけるなアアア！！！」」

その内2人が無謀にも少年に飛びかかつていぐ。彼の目には、その動きが止まつてゐる様に見えた。

スローモーションで動く奴らに迷うことなく斬撃を浴びせる。

「ぐあああつ……」「がつ」

少年の影がゆらりと消えた後、一人の身体が傾き、遅れて鮮血が噴き上がつた。

返り血を浴び、月と炎を背にして立つ彼の瞳が妖しく光つていた。禍々しく昏い紅。

ダンツ、と地面を蹴り、悄然としている残党共に襲い掛かる。その姿は、先程までの非力そうな少年ではない。その瞳に宿つた深い悲しみと怒り・・・。

彼の中の何かが目覚めた瞬間だつた。

刀が唸りをあげて肉を裂き、血煙をあげる。ほとんどの者が、微動だにしないうちに葬られていく。其れ程、彼の動きが速すぎ、また

刀は切れ味も衰えぬままであった。そして最後の一人…あの狐顔の男だつた。

「くつ！」

彼は迫り来る大瀑布の様な氣に押されつつも、辛うじて最初の一撃を防いでみせた。ぎちぎちと刃同士が鳴る。

（重い・・・つ！ タつきの鎧迫り合いとは天と地ほども違う・・・！）

ふいにすつと刀を引いた駿一郎に懐に入られてしまう。体格は子供のままの彼は、威力だけが増した拳を放つ。

ドガツ！！

「ぐはああつ！！」

屋敷の壁を突き破つて廊下に投げ出される。破れた着物の下から、首に下げているお守りが見えた。その表面に縫い取られている紋は、『丸に三つ葉葵』。咳き込んでいた男が、射した影に反射的に顔を上げる。

「徳川の者か」

口を開こうとした男の視界が、漆黒の輝きで埋め尽くされた。

喉に突き刺した刀をゆっくりと抜く。刀身に纏わりついた血は何時の間にか刀に吸い込まれて消えた。駿一郎はふらふらと惨劇を繰り広げた部屋に戻り、鞘を拾つて刀を戻した。とたんに暗黒の冷たい氣も消え、普通の日本刀に戻る。ふと思い出して柄に彫られた銘を見る。

『天之尾羽張』

それを腰に差したとき、駿一郎は膝からすとんと崩れ落ちた。

「・・・つう」

遅れてやつてきた嗚咽と、喉をつく嘔吐感。それらをぐつと堪え、ややふらつく脚で立ち上がつた。

最後に一度、部屋の中を振り返る。部屋の中央で、畳を黒々と染め

ている血の出所を見ても、少年の心は乾ききついていて何も感じることが出来ない。能面のよつたな顔のまま、少年は紅蓮の炎の中を歩き始める。後ろで燃えた長屋が崩れ落ちよつと、恐怖に駆られた人々が脇を駆け去つていこうと、少年の歩む速度は変わらなかつた。

守るべきものも、自分自身の概念さえも、すでに焼け落ちてしまつた。

もう、自分には何も残つていない。

唇の端に自嘲の笑みを刻みながら、彼は炎に包まれた江戸城を見上げた。それに手を伸ばし、広げた掌で握りつぶす。

その後の少年の足取りはようとして知れず、市富一家は大江戸大火で亡くなつたものとされた。

(後書き)

えー、と。

この小説、実はまだ続きます。

これはこれ。続annisは続annisとしてお読みください。  
続annisを読んでいる途中に思い出していただければ、丁度いいかなと。  
続annis、まだ書いてもないけど（おいつつ！！）。一応、頭の中には  
大雑把なストーリーはありますんで、早ければ来年の1月くらいに  
はうロができるかと。

遠つ！

（だつてまだまだ調べ物があるんだもの）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7908m/>

---

紅夜に咲いた華

2010年10月10日07時00分発行